

# 制御焦点がパフォーマンスに及ぼす影響

## — 目標達成の観点から —

外山美樹<sup>1</sup> 長峯聖人<sup>2</sup> 湯立<sup>3</sup> 肖雨知<sup>4</sup> 三和秀平<sup>5</sup> 相川充<sup>6</sup>

<sup>1,2,3,4,5,6</sup> 教育テスト研究センター <sup>1,6</sup> 筑波大学人間系

<sup>2,3,4</sup> 筑波大学大学院人間総合科学研究科 <sup>5</sup> 関西外国語大学外国語学部

本研究の目的は、制御焦点と目標達成が後続課題のパフォーマンスに及ぼす影響を検討することであった。本研究では、一般的な認知課題を用いて、「先行課題での目標が未達成の状況では、促進焦点と防止焦点で後続課題のパフォーマンスに差はないが、目標が達成されている状況では、防止焦点は促進焦点よりも後続課題のパフォーマンスが低い」という仮説を検証した。本研究の実験参加者は、大学生 64 名であり、実験的に操作された状況としての制御焦点を用いた。本研究の結果より、仮説が支持された。すなわち、一般的な認知課題であっても、防止焦点は、ある目標が達成されると、後続課題のパフォーマンスが低いことが示された。本研究より、制御焦点とパフォーマンスの関連を検討する際には、複数の目標の中での当該目標のパフォーマンスについて検討していく必要性が示唆された。

キーワード：制御焦点，促進焦点，防止焦点，パフォーマンス，目標達成

## 1. 問題と目的

### 1.1 はじめに

動機づけ研究の領域では、長年、動機づけをどう区別するかが議論されてきた (Molden, Lee, & Higgins, 2008)。この流れの中で、近年注目されているのが、動機づけを促進焦点と防止焦点の軸で捉える制御焦点 (regulatory focus) である。

制御焦点理論では、特性としての制御焦点だけではなく、状況としての制御焦点を積極的に扱っている点、大きな特徴である。個人の特性を変容させることは容易なことではないが、状況としての制御焦点は操作・介入を行いやすいため、教育的な介入の可能性を広げることができる。

本研究は状況としての制御焦点を取り上げ、制御焦点がパフォーマンスに及ぼす影響について、目標達成の観点から検討することを目的にしている。

### 1.2 制御焦点理論

Higgins(1997)は、目標に対する志向性を特徴づける理論として、制御焦点理論(regulatory focus theory)を新たに提唱した。制御焦点理論では、人の目標志向性には、獲得の在に接近し、獲得の不在を回避するよう動機づけられ、理想や希望を実現することを目標とする促進焦点(promotion focus)と、損失の不在に接近し、損失の在を回避するよう動機づけられ、義務や責任を果たすことを目標とする防止焦点(prevention focus)の2つがあると仮定している。

ひとりの人間は促進焦点と防止焦点の両方の目標志向性を有しているが、どちらが優勢になるかは、置かれている状況によって異なる(Eitam, Miele, & Higgins, 2013; Higgins, 1997)。そこで、制御焦点に関する研究では、フレーミングやプライミングの手法を用いて、促進

焦点あるいは防止焦点を活性化させ、それによって発現する特徴について検討することが多い。

促進焦点あるいは防止焦点を活性化させるために、たとえば、基準を上回っていれば報酬を獲得することができるが上回っていなければ報酬を獲得することができないと教示する条件（促進焦点条件）と、基準を下回っていれば報酬を失うが下回っていなければ報酬を失うことはないという教示する条件（防止焦点条件）を設定したり（Rosenzweig & Miele, 2016; Shah, Higgins, & Friedman, 1998）、自己について考えさせる際に、理想自己を考えさせる条件（促進焦点条件）と義務自己を考えさせる条件（防止焦点条件）を設定したりする（Higgins, Idson, Freitas, Spiegel, & Molden, 2003）。このように、獲得や理想の状況あるいは損失や義務の状況を喚起させることによって、間接的に促進焦点か防止焦点を優勢的に活性化させる。

促進焦点と防止焦点のどちらも活性化されていない場合、促進焦点と防止焦点のどちらの傾向がより優位なのかを、尺度（e.g., Promotion / Prevention Focus Scale (Lockwood, Jordan, & Kunda, 2002); Regulatory Focus Questionnaire (Higgins et al., 2001)）によって判断する方法もある。この方法では、制御焦点を、個人差を反映する特性要因として捉えている。

人は望ましい目標の最終状態に向かって、状況や特性によって促進焦点か防止焦点かという質的に異なった志向を持つため、情報や評価に対する鋭敏さ、判断や推論の方略、目標遂行過程において、異なる心理的特徴を発現することが示されている（Molden et al., 2008）。

### 1.3 制御焦点と目標達成がパフォーマンスに及ぼす影響

促進焦点と防止焦点は、常にどちらかが優れたパフォーマンスを示すのではない。

たとえば、促進焦点は防止焦点よりも、速さや創造性課題のパフォーマンス（以下、創造的パフォーマンスとする）が優れている（Scholer & Higgins, 2012）。他方で、防止焦点は促進焦点よりも、正確さや分析的課題のパフォーマンスが優れている（Scholer & Higgins, 2012）。一般的な認知課題（e.g., アナグラム課題、計算課題）のパフォーマンスでは、両方で差が見られないことも報告されている（e.g., Shah et al., 1998）。

このように、どちらの制御焦点のパフォーマンスが優れているのか、あるいは両方で差がないのかは、課題のタイプによって異なることが報告されている。

また、制御焦点と創造的パフォーマンスの関連を扱った研究では、文脈を加味した検討が行われ始めている。Baas, De Dreu, & Nijstad (2011) は、制御完了（regulatory closure；目標が達成されている状態。ほかの諸研究との関連性を考慮して、以下「目標達成」と記す）／制御未完了（regulatory no-closure：目標が達成されていない状態。以下「目標未達成」と記す）という概念を用いて、制御焦点と創造的パフォーマンスの関連を検討した。Baas et al. (2011) では、創造性課題に取り組む前に別の先行課題を実験参加者に実施することによって、先行課題の目標達成／未達成の状況を操作した。その結果、促進焦点では、目標達成と目標未達成の両条件で創造的パフォーマンスに差は見られなかったが、防止焦点では、目標達成条件よりも、目標未達成条件の方が、創造的パフォーマンスが高かった。また、目標達成条件においては、促進焦点のほうが防止焦点よりも創造的パフォーマンスが高いが、目標未達成条件においては、促進焦点と防止焦点で創造的パフォーマンスに差は見られないことが示された。

促進焦点に動機づけられている個人は、獲得することに関心が高いため、リスクで大胆な行動（例えば、積極的に新奇な回答を検索する、ミスをおそれずに反応する）をとりやすく、防止焦点に動機づけられている個人は、損失を避けることに焦点が当てられているため、保守的で警戒的な行動（例えば、課題に粘り強く取り組む、ミスをおそれて正確に反

応する)をとりやすい (Crowe & Higgins, 1997; Hamstra, Bolderdijk, & Veldstra, 2011)。

新奇性と適切さ(実用さ)の両方を有するアイデアの産出ならびに洞察や問題解決の産出である創造活動 (Guilford, 1967; Hennessey & Amabile, 2010)には、柔軟的、流暢的、拡散的思考スタイル(以下、「柔軟な認知スタイル」とする)が必要となるため、そうした認知スタイルをとる促進焦点は、防止焦点よりも創造的パフォーマンスが優勢であることがこれまで示されてきた (Friedman & Förster, 2001, 2005)。しかし、近年、創造性研究 (De Dreu, Baas, & Nijstad, 2008)において、柔軟な認知スタイルとは別に、防止焦点がとるような、粘り強く、系統的な思考スタイル(以下、「持続的な認知スタイル」とする)も創造活動に寄与する可能性が提出された。そこでは、柔軟な認知スタイルと持続的な認知スタイルはともに独立して創造活動を高めるが、両者の違いは認知資源の消耗であることも指摘されている (De Dreu et al., 2008)。柔軟な認知スタイルは、必要とされる努力や認知資源が少なく、速くて効率的なスタイルであるのに対して、持続的な認知スタイルは、多くの努力、忍耐、速度の遅い処理と関連しており (De Dreu et al., 2008; Dietrich, 2004)、こうした認知スタイルは実行制御とワーキングメモリの容量が必要であるため、有限な認知資源をより多く消費することが指摘されている (Roskes, Elliot, Nijstad, & De Dreu, 2013)。そのため、これまで創造性課題が苦手であると考えられてきた防止焦点においては、促進焦点には必要のない認知資源を投入することによって動機づけを高め、根気強く持続的に課題に取り組むことができれば、促進焦点と同程度の高い創造的パフォーマンスを収めることができると考えられている (De Dreu et al., 2008)。たとえば、Roskes, De Dreu, & Nijstad (2012)やRoskes et al. (2013)は、創造性課題における自我関与や重要性を高めると、防止焦点も促進焦点と同様の創造的パフォーマンスを示すことを報告している。先に紹介したBaas et al. (2011)では、目標未達成条件では、促進焦点と防止焦点で創造的パフォーマンスに差は見られないことが示されたが、先行課題の目標が未達成のために動機づけが維持されるといったような状況では、防止焦点においても促進焦点と同程度の創造的パフォーマンスを示すことができる。

本研究では、Baas et al. (2011)の目標達成時と目標未達成時において防止焦点のパフォーマンスに差が見られた結果に対して、上記とは異なった解釈の可能性を提案したい。すなわち、Baas et al. (2011)の防止焦点によるパフォーマンスの結果は、目標達成時に比べて、目標未達成時に認知資源を投入したことによってパフォーマンスが高まったのではなく、目標達成時に意図的に認知資源を投入しなかったために、目標未達成時に比べてパフォーマンスが低くなったという可能性である。しかし、これまで防止焦点において不得手であると考えられてきた創造性課題のパフォーマンスを用いたならば、この可能性を検討することはできない。そこで、本研究では促進焦点と防止焦点で有利な差が見られない一般的な認知課題を用いて、上記の可能性を検討することにした。

Roskes et al. (2012, 2013)では、警戒的で粘り強い認知スタイルをとる防止焦点は、創造性課題が不得意であるが、認知資源を投入すれば防止焦点に不利な創造的パフォーマンスを補うことができることを指摘している。しかし、仮に、促進焦点と防止焦点でパフォーマンスに差は見られない課題でも、防止焦点においてはある目標を達成すると後続課題のパフォーマンスが低くなるという傾向が見られるならば、そのメカニズムはRoskes et al. (2012, 2013)の研究成果では説明できないことになるだろう。本研究ではそのメカニズムの説明として、1つの目標の達成が別の目標の追求に及ぼす影響を検討したFishbach, Dhar, & Zhang (2006)の知見を援用したい。

#### 1.4 1つの目標の達成が別の目標への追求に及ぼす影響

Fishbach et al. (2006)は、人は、上位目標を意識していない場合(具体的には、上位目

標を活性化させる実験手続を行っていない場合)では、1つの目標を達成すると、別の目標を追求しなくなることを示した。研究1では「1週間後に試験がある」という仮想場面を大学生に提示した後に、目標達成条件では「今日の昼間、あなたはたくさん勉強した」と教示し、目標未達成条件には「今日の昼間、あなたはいつも通りに勉強した」と教示した。そして、別の目標を追求しようとするか尋ねた。ここでは、夜の勉強時間をその指標とし、「夜、どのくらい勉強すると思うのか」を尋ねた。その結果、目標達成条件のほうが、目標未達成条件よりも有意に別の目標の追求が弱いことが示された。研究3では、目標達成条件(先行課題において、「あなたの成績は、他の人たちよりも優れていた」と教示)のほうが、目標未達成条件(先行課題において、「あなたの成績は、平均以下でした」と教示)よりも、後続の解決不可能な課題における従事時間が有意に短いことが示された。

Fishbach et al. (2006) は、1つの目標を達成すると、目標を完遂したという感覚が生じるため、目標からの解放を正当づけることにつながり、別の目標を追求しなくなる可能性を指摘している。Fishbach et al. (2006) の研究は、別の目標を追求するのかどうかを、結果(e.g., パフォーマンスや行動)ではなく動機づけの観点から検討したものであるが、この知見に鑑みると、Baas et al. (2011) の結果は、防止焦点においては、1つの目標が達成されることによって別の目標への追求の動機づけが低下し、その結果、後続課題のパフォーマンスが低下したが、他方、促進焦点においてはそのような傾向は見られなかったと解釈することが可能である。つまり、Fishbach et al. (2006) で示された、1つの目標が達成された場合の別の目標への追求の傾向は、制御焦点によって異なることが示唆される。

警戒的で慎重な持続的認知スタイルをとる防止焦点は、実行制御とワーキングメモリの容量が必要であるため、有限な認知資源を多く消耗する特徴がある(Roskes et al., 2013)。そのため、促進焦点に比べて、防止焦点は認知資源が不足することに対して敏感で、認知資源を投入する状況を慎重に選択することが示されている(外山他, 印刷中)。目標を達成した場合に未達成に比べて、防止焦点のパフォーマンスが低いというBaas et al. (2011) の結果は、目標を達成した後の課題は重要ではないため、防止焦点に動機づけられていると、当該課題に認知資源を投入する必要はないと意図していたことに起因する可能性が考えられる。ただし、Baas et al. (2011) の研究は、防止焦点に不利な創造性課題でのパフォーマンスを用いているため、こうした解釈の可能性を主張することは早計であろう。

### 1.5 本研究の目的

本研究では、上記の解釈の可能性を検討すべく、創造的パフォーマンスを指標とした場合に見られたBaas et al. (2011) の結果が、促進焦点と防止焦点の両方でパフォーマンスの有利さに差が見られない一般的な認知課題(e.g., アナグラム課題や計算課題(Shah et al., 1998))を用いた場合にも見られるのかどうかを確認することを目的とする。防止焦点に不利な創造性課題ではなく、促進焦点と防止焦点で有利な差が見られない一般的な認知課題を用いて検討することで、制御焦点とパフォーマンスの関係における目標達成の影響について、より深く検討することが可能になる。

制御焦点は、実験的に操作する、状況としての制御焦点を用いる。特性ではなく状況に焦点を当てるのは、冒頭で述べた通り、状況要因は教育的な介入を行いやすい要因だからである。パフォーマンスの指標は、制御焦点の両方で有利さに差はないことが示されている(e.g., 外山他, 2018) 計算課題を用いることにした。本研究の仮説は、以下の通りである。

一般的な認知課題を指標にした時にも、Baas et al. (2011) と同様の結果が得られる。すなわち、先行課題での目標が達成されている状況では、促進焦点よりも、防止焦点は後続課題のパフォーマンスが低い、目標が未達成の状況では、促進焦点と防止焦点で後続課

題のパフォーマンスに差はない。ならびに、防止焦点は、目標達成の時に、目標未達成時と比べてパフォーマンスが低い。

## 2. 方法

### 2.1 実験参加者

大学生 64 名（男子 30 名，女子 34 名）が実験に参加した。平均年齢（SD）は 19.83（1.30）であった。

### 2.2 実験計画

本実験は、制御焦点（促進焦点，防止焦点）と目標達成（達成，未達成）の 2 要因を独立変数とする実験参加者間計画であった。実験参加者 64 名を，16 名ずつ 4 条件（「促進焦点＋目標達成」，「促進焦点＋目標未達成」，「防止焦点＋目標達成」，「防止焦点＋目標未達成」）のいずれかに割り当てた。

### 2.3 実験課題と実験手続き

実験は 1 人ずつ実験室で行った。実験参加者に実験についての説明を十分に行い，同意書への署名を求めた。なお，実験参加者には，本実験では，創造性を測定する課題を実施すると説明した。

まず，制御焦点の操作を行った後に，課題 1 を実施した。課題 1 は，拡散的洞察課題（Unusual Use Test (Guilford, 1967)；以下，UUT とする）を用いた。UUT は，日常で使うモノの通常とは異なる使い方をできるだけ多く回答するもので，創造性の拡散的思考を測定する課題として使用されている。山岡・湯川（2017）に準拠し，例題として「レンガ」（回答時間は 30 秒），本題として「靴下」と「缶詰の缶」（回答時間はそれぞれ 2 分間）を出題した。

課題 1 が終了した後で，本実験には関係のない質問紙に回答してもらった。その質問紙を実験参加者に渡す前に，質問紙に回答している間に実験者が実験課題の採点を行うこと（実際は，採点を行っているふりをした），質問紙回答後に結果をフィードバックする旨を伝えた。その後，目標達成の操作を行った。

続いて，課題 2 を実施した。実施する前に実験参加者に，創造性とは異なる課題であるが，著者らが開発している知能検査の予備実験の課題を実施し，課題終了後に成績をフィードバックすると伝えた。

課題 2 は，佐藤（2003）の計算課題を用いた。この計算課題は，不完全な不等式の左辺の数字の間（問題文には□で記されている）に 4 種類の演算子（+，-，×，÷）のいずれかを当てはめて等式を成立させる課題である（e.g.,  $1 \square 5 \square 7 \square 4 = 8$ ）。佐藤（2003）より 20 問を選択した。なお，予備調査（ $n=20$ ）を実施し，促進焦点と防止焦点でパフォーマンスに差がみられないことを確認した。制限時間は，予備調査の結果をもとに，制限時間内に全問解くことができない 10 分とした。課題のやり方を説明し，例題を遂行させ，やり方を理解していることを確認した上で本課題を実施した。本研究では，別の目標の追求を示す指標として，パフォーマンス（計算課題の正答数）を用いた。

課題 2 が終わった後，実験操作のチェックを口頭で行った。具体的には，制御焦点の操作と目標達成の操作として用いた教示を，実験参加者に再生してもらった。

実験終了後，デブリーフィングとして実験の目的を伝え，デブリーフィング後の同意書の記入を求め，謝礼として 500 円のクオカードを渡し，すべての実験を終了した。なお，研究の実施にあたっては，筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得た（課題番号：筑 29-52）。

### 2.4 制御焦点の操作

実験参加者は、促進焦点条件、防止焦点条件のいずれかに割り当てられた。促進焦点条件 ( $n=32$ ) では、実験参加者の課題 1 の成績が、一般大学生の平均以上 (上位 50%以内) の成績に入るように教示し、防止焦点条件 ( $n=32$ ) では、実験参加者の課題 1 の成績が、一般大学生の平均以下 (下位 50%以内) の成績に入らないように教示した。目指す目標は同じであっても、促進焦点条件では獲得に、防止焦点条件では損失に焦点が当てられている。こうした方法は、制御焦点の活性化の有効な手法として用いられている (e.g., Rosenzweig & Miele, 2016; Shah et al., 1998)。

## 2.5 目標達成の操作

課題 1 終了後に、促進焦点、防止焦点条件別に、目標達成の操作を行った。促進焦点条件では、目標達成は「平均以上に入ることができた」、目標未達成は「平均以上に入ることができなかった」と教示を行った。防止焦点条件では、目標達成は「平均以下に入ることが回避できた」、目標未達成は「平均以下に入ることが回避できなかった」と教示した。

## 3. 結果

制御焦点の操作ならびに目標の達成の操作で用いた教示を間違えて理解していた実験参加者は、誰もいなかった。

制御焦点 (促進焦点、防止焦点) と目標達成 (達成、未達成) を独立変数、課題 2 のパフォーマンス得点を従属変数とする 2 要因分散分析を行った。その結果、制御焦点の主効果 ( $F(1,60)=3.77, p=.06, \eta^2_p=.06$ ) が有意傾向、交互作用 ( $F(1,60)=5.34, p=.02, \eta^2_p=.08$ ) が有意となった。目標達成の主効果 ( $F(1,60)=0.40, p=.53, \eta^2_p=.01$ ) は有意とならなかった。

単純主効果検定を行ったところ、制御焦点の単純主効果は、目標達成条件で有意となり ( $F(1,60)=9.33, p=.00, \eta^2_p=.14$ )、促進焦点条件 ( $M=13.00, SD=4.03$ ) が防止焦点条件 ( $M=8.88, SD=3.48$ ) よりもパフォーマンス得点が高かった。一方、目標未達成条件では有意とならなかった ( $F(1,60)=0.07, p=.80, \eta^2_p=.00$ )。

目標達成の単純主効果は、促進焦点条件では有意とならなかった ( $F(1,60)=1.45, p=.23, \eta^2_p=.02$ ) が、防止焦点条件で有意となり ( $F(1,60)=4.21, p=.04, \eta^2_p=.07$ )、目標達成条件 ( $M=8.88, SD=3.48$ ) よりも、目標未達成条件 ( $M=11.73, SD=4.08$ ) において、パフォーマンス得点が高かった。結果を Figure 1 に示した。

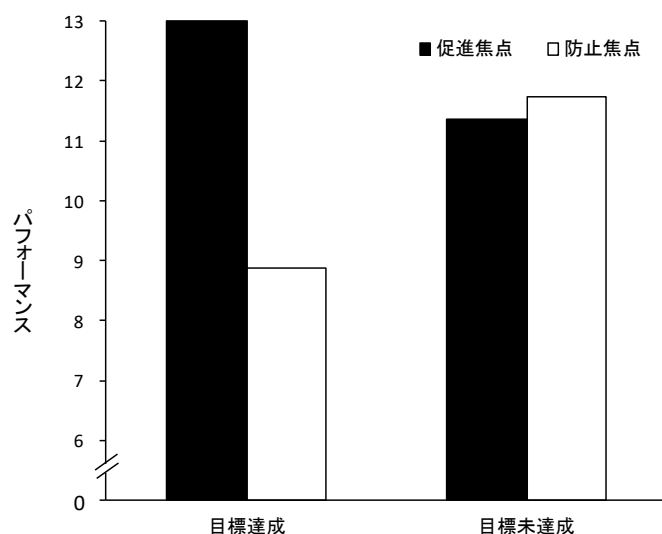


Figure 1. 制御焦点 (促進 v.s. 防止) と目標達成 (達成 v.s. 未達成) がパフォーマンスに及ぼす影響

#### 4. 考察

本研究は、制御焦点と目標達成が後続課題のパフォーマンスに及ぼす影響について検討したものである。具体的には、目標を達成すると防止焦点の創造的パフォーマンスが低下するという Baas et al. (2011) の結果に対して、促進焦点と防止焦点のパフォーマンスにおいて差が見られない一般的な認知課題である計算課題を用いた場合にも同様の結果が見られるのかどうかを検討した。

本研究の結果より、計算課題のパフォーマンスを指標にした場合においても、防止焦点は、先行課題の目標が達成されると、後続課題のパフォーマンスが低いことが示され、仮説が支持された。

目標が未達成の状況では、促進焦点と防止焦点で後続課題のパフォーマンスに差はないが、目標が達成されている状況では、防止焦点は促進焦点よりも後続課題のパフォーマンスが低いという本研究の結果は、Baas et al. (2011) と同様であるが、そのメカニズムは異なるだろう。Baas et al. (2011) は、防止焦点に不得意な創造性課題を用いて、目標達成と未達成の効果を検討したものであり、促進焦点よりも、防止焦点は創造的パフォーマンスが低い、目標が未達成であるという動機づけが維持されるような状況においては、防止焦点においても促進焦点と同程度の創造的パフォーマンスを示すことを実証したものである。これに対して本研究は、促進焦点と防止焦点でパフォーマンスに差は見られない一般的な認知課題において、防止焦点は先行課題の目標を達成するとパフォーマンスが低くなるという結果を示した。警戒的で慎重な処理スタイルをとる防止焦点は、有限な認知資源を多く消費する特徴があるため、認知資源が不足することに対して敏感で、認知資源を投入する状況を慎重に選択する必要がある (Roskes et al., 2013)。そこで、防止焦点に動機づけられている人は、目標を達成した後の課題は重要ではないため、当該課題に認知資源を投入する必要はないと意図していたと考えられる。その結果、目標が達成されている状況では未達成時に比べて、パフォーマンスが低下したのだろう。

他方、探索的で柔軟な処理スタイルをとる促進焦点では、認知資源を温存する必要はなく、目標の達成の有無にかかわらず、いわば無差別的に認知資源を投入するものと考えられる。そのため、目標達成後においても後続課題のパフォーマンスは維持されやすいと考えられる。本研究では、認知資源の温存の意図については測定していないため、今後は、制御焦点による認知資源の温存の意図の違いがパフォーマンスに及ぼす影響について詳細に検討することが望まれる。

「問題」で述べた通り、目標追求の研究 (Fishbach et al., 2006) では、1つの目標を達成すると未達成の時と比べて、別の目標を追求しなくなることが示されているが、本研究の結果は、1つの目標が達成された場合の別の目標への追求の傾向は、制御焦点によって異なることを示した。近年の目標に関する研究では、これまでの研究が1つの目標しか扱ってこなかったことを問題視し (Fishbach et al., 2006)、複数の目標をどのように人が評価し、選択するのかについて焦点が当てられるようになってきた (Kruglanski et al., 2002; Shah & Kruglanski, 2003)。目標間の目標追求のプロセスについては、Fishbach et al. (2006) を除いてこれまで検討されることは少なかったが、一般に人は同時にたくさんの目標を抱えているため、目標間のバランス (cf. Dhar & Simonson, 1999; Fishbach & Dhar, 2005) の中で目標追求を考えていかなければならない。本研究は、1つの目標が達成された時と達成されていない時における後続課題のパフォーマンスが、制御焦点によって異なることを示した点において、目標追求の研究に対しても一定の学術的貢献を与えるものと考えられる。

今後も、制御焦点とパフォーマンスの関連を検討する際には、複数の目標 (課題) の中で当該目標 (課題) のパフォーマンスについて検討していく必要があるだろう。また、

競合する目標間の目標追求プロセスについても、今後検討していく必要がある。

最後に、本研究の限界を述べる。本研究では状況としての制御焦点しか扱っていない。既述した通り、制御焦点には、本研究で扱った状況としての制御焦点のほかに、特性としての制御焦点がある。制御焦点は状況的なものとして扱う場合と特性的なものとして扱う場合の2通りが存在し (e.g., Rosenzweig & Miele, 2016), 両者の結果が一致していることをもって結果の頑健性を示すことが多い。したがって今後、特性的な制御焦点を扱った場合にも、本研究と同様の知見が得られれば、本研究で得られた結果は一般化できるであろう。

## 謝辞

実験の実施にあたり、筑波大学人間学群心理学類（所属は当時）の井上拓哉さんの協力を得た。心より感謝申し上げます。また、実験にご協力いただいたすべての方々に、厚く御礼申し上げます。

## 引用文献

- Baas, M., De Dreu, C.K.W., & Nijstad, B.A. (2011) When prevention promotes creativity: The role of mood, regulatory focus, and regulatory closure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 100:794-809.
- Crowe, E., & Higgins, E. T. (1997) Regulatory focus and strategic inclinations: Promotion and prevention in decision-making. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 69: 117-132.
- De Dreu, C.K.W., Baas, M., & Nijstad, B.A. (2008) Hedonic tone and activation level in the mood-creativity link: Toward a dual pathway to creativity model. *Journal on Personality and Social Psychology*, 94:739-756.
- Dhar, R., & Simonson, I. (1999) Making complementary choices in consumption episodes: Highlighting versus balancing. *Journal of Marketing Research*, 36:29-44.
- Dietrich, A. (2004) The cognitive neuroscience of creativity. *Psychonomic Bulletin and Review*. 11:1011-1026.
- Eitam, B., Miele, D.B., & Higgins, E.T. (2013) Motivated remembering: Remembering as accessibility and accessibility as motivational relevance. In D.E. Carlston (Ed.), *The Oxford Handbook of Social Cognition* (pp. 463-475). New York, NY: Oxford University Press.
- Fishbach, A., & Dhar R. (2005) Goals as excuses or guides: The liberating effect of perceived goal progress on choice. *Journal of Consumer Research*, 32:370-377.
- Fishbach, A., Dhar R., & Zhang, Y. (2006) Subgoals as substitutes or complements: The role of goal accessibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91:232-242.
- Friedman, R. S., & Förster, J. (2001) The effects of promotion and prevention cues on creativity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81:1001-1013.
- Friedman, R. S., & Förster, J. (2005) Effects of motivational cues on perceptual asymmetry: implications for creativity and analytical problem solving. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88:263-275.
- Guilford, J. P. (1967) *The nature of human intelligence*. New York, NY: McGraw-Hill.
- Hamstra, M. R., Bolderdijk, J. W., & Veldstra, J. L. (2011) Everyday risk taking as a function of regulatory focus. *Journal of Research in Personality*, 45:134-137.
- Hennessey, B.A. and Amabile, T.M. (2010) Creativity. *Annual Review of Psychology*, 61:569-598.



- Higgins, E.T. (1997) Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, 52:1280-1300.
- Higgins, E.T., Friedman, R.S., Harlow, R.E., Idson, L.C., Ayduk, O.N., & Taylor, A. (2001) Achievement orientations from subjective histories of success: Promotion pride versus prevention pride. *European Journal of Social Psychology*, 31:3-23.
- Higgins, E.T., Idson, L.C., Freitas, A.L., Spiegel, S., & Molden, D.C. (2003) Transfer of value from fit. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84:1140-1153.
- Kruglanski, A. W., Shah, J.Y., Fishbach, A., Friedman, R., Chun, W.Y., & Sleeth-Keppler, D. (2002) A theory of goal system. In M.P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (vol.34, pp. 331-378). SanDiego, CA: Academic Press.
- Lockwood, P., Jordan, C. H., & Kunda, Z. (2002) Motivation by positive or negative role models: Regulatory focus determines who will best inspire us. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83:854-864.
- Molden, D.C., Lee, A.Y., & Higgins, E.T. (2008) Motivations for promotion and prevention. In J. Shah, & W. Gardner (Eds.), *Handbook of motivation science* (pp. 169-189). New York: Guilford Press.
- Rosenzweig, E.Q., & Miele, D.B. (2016) Do you have an opportunity or an obligation to score well?; The influence of regulatory focus on academic test performance. *Learning and Individual Differences*, 45:114-127.
- Roskes, M., De Dreu, C. K. W., & Nijstad, B. A. (2012) Necessity is the mother of invention: Avoidance motivation stimulates creativity through cognitive effort. *Journal of Personality and Social Psychology*, 103:242-256.
- Roskes, M., Elliot, A. J., Nijstad, B. A., & De Dreu, C. K. (2013) Time pressure undermines performance more under avoidance than approach motivation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 39:803-813.
- 佐藤 雄 (2003) 集団での学習性無力感実験における統制不可能性の検討 日本健康心理学会第 16 回大会発表論文集, 156-157.
- Scholer, A.A., & Higgins, E.T. (2012) Too much of a good thing? Trade-offs in promotion and prevention focus. In R. M. Ryan (Ed), *The oxford handbook of human motivation* (pp.65-84). New York: Oxford University Press.
- Shah, J.Y., Higgins, E.T., & Friedman, R. (1998) Performance incentives and means: How regulatory focus influences goal attainment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74:285-293.
- Shah, J.Y., & Kruglanski, A.W. (2003) When opportunity knocks: Bottom-up priming of goals by means and its effects on self-regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84:1109-1122.
- 外山 美樹・湯 立・長峯 聖人・黒住 嶺・三和 秀平・相川 充 (2018) 制御焦点がパフォーマンスに及ぼす影響—学習性無力感パラダイムを用いた実験的検討— 教育心理学研究, 66:287-299.
- 外山 美樹・湯 立・長峯 聖人・三和 秀平・相川 充 (印刷中) 防止焦点は認知資源の温存効果に優れているのか? 心理学研究
- 山岡 明奈・湯川 進太郎 (2017) マインドワンダリングおよびアウェアネスと創造性の関連 社会心理学研究, 32:151-162.

外山 美樹, 長峯 聖人, 湯 立, 肖 雨知, 三和 秀平, 相川 充